

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

チャールズ・ダーウィンの説いた自然淘汰による進化論こそ、細部が実証されていないので仮説の域を出ないにしても、自然科学的な理論であった。種に属する個体の形質は遺伝的浮動において多様性をもっているが、一定数の個体が地理的に隔絶されることにより、特定の形態や能力をもつ個体の数が優勢となって、もはや以前の種に属する個体とは生殖が不確実になることがある。そうやって新たな種が生まれるという説であった(ただし、有性生殖の場合には、それに性淘汰が加わり、目立ちやすさや交尾のしやすさが、その子孫の形態や能力を規定する)。

ダーウィンによると、進化には目的もプログラムも意欲も関係なく、環境的諸要因の偶然的積み重なりによってのみ新たな種が生じたりある種が絶滅したりする、そうした機械論的な原因があるだけである。現在は、その理論を分子遺伝学が支えているが、DNAは生物個体でみな異なっており、その少しずつの変異が個体を進化させ、新たな種を作りだしていくのであって、そのプロセスは機械論的なのである。

ダーウィンの進化論は、従来の比較形態学的な種の分類に代わって、生物の分類を、歴史という時間軸の導入によって、どの種とどの種がどのくらい近いか遠いかという関係で説明しようとする理論でもあった。その結果、甲が種の正しい分類基準とされるようになり、——現代ではDNAの類似性の度合いによって——、進化過程で分岐した時期にまでさかのぼれば、その時間の長さ長さから、近い種か遠い種かというように種を分類することができる。とすれば、形態が似ていなくても近い種だったり、形態が似ていても遠い種だったりすることがあるわけで、これで、それまでの形態学者、比較解剖学者の立場や権威はひっくり返されてしまったのであった。

A、ダーウィンの進化論がひっくり返したのは、従来の生物学ばかりではなかった。それは、人間精神が他の生物に対して特別な地位にあると考えていたひとびとにも大きな打撃を与えることになった。進化論は、神が宇宙を創造してすべての生物をカク定された種として創りだし、人間を地上の支配者としたとするキリスト教、および精神が存在して、それが自然を認識するということを前提していた近代哲学に対する挑戦状でもあったのである。

宗教家たちは、いまでもアメリカのいくつかの州で行われているように、進化論を無視して子どもたちに教えないようにするか、そのプロセスをも含めて神が創ったことだとするかしかなかった。他方、哲学者たちにとっても、単に「生命とは何か」に答えを出せばそれですむといった容易な問題ではなかった。²かれらは近代哲学そのものを根本的に捉えなおさなければならなくなってしまった。

伝統的な生物学は、近代哲学にとってはさほど脅威ではなかった。その目的論的含意には、調和する面もあった。しかし、ダーウィンの進化論は、人間の遠い祖先はアメーバのようなものであり、究極的には突然生じた原始細胞であった、ただそれが変化してきただけだと論じた。そのことは、最古の単細胞生物から、植物、昆虫、爬虫類、哺乳類、そして人間にいたるまで、すべての生物が進化というプロセスによって生じてきたということであり、知性の働かさへも、その結果としての産物にすぎないということを示唆していた。

ダーウィンの進化論をふまえた現代の自然科学者たちは、進化の過程で生物に意識が出現し、脳が発達して知性が生まれたと信じている。そこには、哲学的思考を支える「精神」のようなものは、存在する余地がない。あたかも照明が点灯するように生物身体に意識が発生し、そのうえでさらに宇宙を認識するような知性が生じてくる——そのような自然淘汰などありそうもないのであるが、人間も進化の過程で生じてきた一生物にすぎないとされるのであれば、人間精神とは一体何のことであり、そのことを当の人間精神であるわれわれは、どう理解したらいいのであろうか。

進化論によって精神の存在が脅かされなにかぎり、哲学は、自然科学とは別様にして、人文社会の諸領域、および自然科学を成立させる精神のあり方について論じていることができたのであるが、ダーウィン以降は、どんなことであれ(精神を前提する)近代哲学の延長で論じ続けることが困難となった。その結果、進化論以降の哲学には、ヘーゲル、コント、ジョン・S・ミルなどの進化論以前の哲学との決定的な違いが生まれることになった——それが現代思想のはじまりであった。

現代思想の出發した正確な年を記すとすれば、それは、『種の起源』が書かれた一八五九年ということになるであろう。ダーウィンの進化論は、ラマルクの進化論のように、——著書のタイトルが『動物哲学』であったが——、哲学のもとで生物の歴史を説明するのではなく、生命を歴史によって説明しようとする進化論であった。そのかぎりでは、『種の起源』は、自然科学は哲学なしでやっていけるといけるという、科学の、哲学からの独立宣言のようなものであった。

歴史というものは、従来は英雄や聖人といったリーダーたちの精神がひき起こすものとされてきたが、人間精神は3
のような歴史から引き離され、生命が歴史の主役になった。むしろ歴史が生命**的**なものになったともいえる。現代の宇宙進化論に顕著なように、似たようなことをくり返ししながら年老いていくもの——しかし卵からつぎつぎに同様の形態が生まれてきてはそれに代わっていくようなものの歴史となった。

その結果、学問の存在理由は哲学的概念や哲学的方法論によって与えられるのではなく、歴史によって説明されると考えられるようになった。進化論をきっかけとして、歴史は、人間にとっての出来事の記録であったものが、自然の全過程を含む記録へと変わってしまったのであった。

とはいえ、哲学からの科学の分離という、そうした衝撃的な出来事が起こったことは、一部のひとにしか理解されていなかった。ルソーが「自然に還れ」という意味の主張をしたときには「サルのように行動すべきということか」とチヨウ笑する向きがあったのと同様に、ダーウインの進化論に対しては、せいぜい「われわれの祖先はサルなのか」という反発をもって受けとめられたくらいであった。

進化論への反発に対抗して、人間とゴリラの類似性を強調し、自然界における人間の地位を論じたのが、イギリスのトーマス・H・ハクスリー（一八二五～一八九五）である。ハクスリーは、「ダーウインの番犬」と呼ばれたほど進化論の普及に熱心であったが、しかしそこで、進化論は、一般のひとの常識で分かりやすいものになるという「突然変異」を起こしたのであった。

進化論を「ダーウインニズム」と表記しないわけは、その語が「社会ダーウインニズム」、つまりのちの優生学や社会生物学へと繋がっていったからである。ダーウインの書いたものなかにも「最適者生存」や「生存競争」といった曖昧な概念が見いだされるが、ハクスリーをはじめとして、ダーウインの進化論を喧伝した学者たちは、それらの概念を活用して、「優生思想」を唱えはじめた。それはちょうど、光学を研究したデカルトの理論が顕微鏡や望遠鏡の開発に繋がったように、進化論が社会的に有用性をもつとされる応用理論になったのであった。とはいえ、どこが自然科学的進化論と異なっていたのであろうか。

まず「最適者生存」であるが、そもそも「適応」とは、個体が自分の属する環境において生きやすいあり方を実現することであるから、種については成り立たない。地形によって、活動時間帯によって、あるいはおなじ環境に存在する他の生物種の種類や量によって、生き延びやすさや子孫の作りやすさは変わる。それぞれの種が、他の種の存続に依拠している。その意味では、**乙**のである。

他方、「生存競争」は、『人口論』（二七九八年）を書いたイギリスのトーマス・R・マルサス（二七六六～一八三四）がいいだし、ドイツのエルンスト・H・P・A・ヘッケル（一八三四～一九一九）が取り入れた概念であるが、しかしそれは、たまたま地形や活動時間帯や餌となる他の生物の種類が共通している種のあいだでしか起こらないことなのである。

なお、ヘッケルは、「エコロジ（生態学）」という造語もしている。それは、J・ルイ・R・アカシー（一八〇七～一八七三）の「自然経済」という概念と似ているが、自然には一定の調和が生まれてくるはずであるという前提のもとにあった。ヘッケルには一元論的自然観があつて、それぞれの生物には生きるべき価値があり、**B**物質的諸要素も含めて自然全体が有機的な統一性をもつとしていた。この発想の延長で、今日のように、生物多様性が失われることに対して、あるいはその原因としての地球温暖化に対して、警シヨウが鳴らされているのである。

それに似た「ガイア仮説」や「宇宙船地球号」や「デーブエコロジ」といったスローガンもあるが、その提唱者がみな生物学の門外漢であることから推察できるように、自然科学的な進化論とは無関係であり、先進国が途上国の発展を妨げる口実となるような南北問題の表現でもあった。

進化論を粉飾する概念としては、さらに「**丙**」がある。これは『韓非子』にある古い中国の表現であり、**丁**で起こることを指しているのだが、最強者は増えすぎれば餌やメスを巡って争うし、すべてを食い尽くしたら減じるのだから、進化を説明しているとはいえないのである。

以上のこうした諸概念には、とりわけ、進化した種ほど強く有能で価値があるという非科学的な含意があつた。とりわけダーウインニズムを普及させるのに功のあつたヘッケルが、人類を頂点とする系統樹を描きだし、現在の常識となっている人間観、人類が最も進化した生物である、つまり最も優れていて最も繁栄している生物であつて「地上の支配者」であるというイメージを作りだした——昨今のメディアがCG化したがる新たな聖書である。

それにしても、「支配者」という観念は、(覇権を巡って争う) 帝国主義的発想のもとにある。生物の繁栄という観点では、最も進化の回数が多いのは大腸菌であり、種や個体数が多いのは昆虫であり、強い身体をもつのは猛獣たちである。人類は環境を変化させる能力が高いかもしれないが、地球を酸素の星にしたシアノバクテリアおよび植物たちの能力はもっと高かった。温暖化によって地球環境が激変することが心配されているが、それは現行の諸生物種にとっての問題であって、これまでの激変と同様に、その後に登場することになるあたらしい種にとっては、むしろチャンスだといふことになるであろう。

(船木亨の文章による)

問一 傍線部 a・b・c にあたる漢字を含むものをそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|-------|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|
| 傍線部 a | イ | カク命 | □ | カク分裂 | ハ | 参カク | 二 | 互カク | ホ | カク悟 |
| 傍線部 b | イ | 断チヨウ | □ | チヨウ罰 | ハ | チヨウ問 | 二 | チヨウ候 | ホ | チヨウ弄 |
| 傍線部 c | イ | 談シヨウ | □ | 時シヨウ | ハ | 中シヨウ | 二 | シヨウ抛 | ホ | シヨウ諾 |

問二 空欄 A・B に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- | | | | | |
|---|---|------|---|------|
| イ | A | たとえば | B | むしろ |
| □ | A | だが | B | たとえば |
| ハ | A | たしかに | B | 一方で |
| ニ | A | しかし | B | さらには |
| ホ | A | けれども | B | とりわけ |

問三 傍線部 1「そのプロセスは機械論的なのである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ DNAの違いは環境的諸要因によって決定し、意図的な性淘汰を伴いつつ個体の進化が跡づけられるということ。
- DNAは個体間に差異があり、個体の生得的な形態や意思に基づく小さな変異の蓄積こそが進化であるということ。
- ハ 分子遺伝学の観点では、進化の過程は多様性を維持し、新種を産み出す個体の連続性によって説明できるといふこと。
- ニ 従来の比較形態学の分類ではなく、歴史という時間軸の導入により種の進化の過程が説明可能になるといふこと。
- ホ 意思や目的とは無関係に、偶発的な環境的諸要因の蓄積によって変異が生じ、進化の過程が決定されるということ。

問四 空欄 甲 に入る最も適切な語句を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 形態による分類
- 実験による実証
- ハ 時間による検証
- ニ 歴史を遡ること
- ホ 系統を描くこと

問五

傍線部2「かれらは近代哲学そのものを根本的に捉えなおさなければならなくなってしまった」とあるが、その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ キリスト教が前提とする人間精神の特異性に対して、自然科学者たちは知性という進化の象徴を哲学に新しく示したから。

ロ 人間の祖先が突然生じた原始細胞ならば知性の働きも人間固有のものとはいえず、すべての生物に精神が存在することになるから。

ハ 哲学者は人間を他の生物と差別化する基準に人間精神を見ていたが、進化論は精神を否定し自然科学の学問的優位を論じたから。

ニ 進化論は知性の働きさえも生物の進化の過程で生じた結果に過ぎないものとして、人間精神の特殊性を否定したから。

ホ 進化論はすべての生物が人間と同じ種に帰属し、知性の働きに基づく「精神」などそもそも存在しないと考えていたから。

問六

傍線部3「人間精神はそのような歴史から引き離され、生命が歴史の主役になった」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 哲学から科学を分離することにより人間精神を歴史の中心に置くのではなく、生命の営みとして人間の歩みを記録するようになったということ。

ロ 英雄や聖人といった人間を中心に来来事の時間を記述するのではなく、全生命を平等に再現するものとして歴史が捉えられるようになったということ。

ハ 人間精神に根拠付けられる出来事の記録ではなく、自然の反復・全過程を視野に入れながら記録していくものとして歴史が捉えられるようになったということ。

ニ 歴史を近代哲学の範疇ではなく生物学の側に移すことによって、人文学的な歴史観ではなく自然科学的な方法で人間精神を評価するようになったということ。

ホ 英雄や聖人を描くことで歴史の象徴とするのではなく、自然科学的手法をとることで人物たちの客観的な評価が可能になったということ。

問七

傍線部4「どこが自然科学的進化論と異なっていたのであろうか」とあるが、その疑問に対して筆者はどうか考えているか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ もともと他の種と共存することであらゆる種は進化し繁栄するが、自然環境との相互作用を考慮に入れない独善性を批判している。

ロ 環境に対する生きやすさは個体については認められても種については成り立たず、あくまでも人間個人の問題に還元している点を疑問視している。

ハ 人間こそが様々な環境の中で最も進化した種であり、他の種と比して価値が高く有能であるという発想に非科学性を見ている。

ニ 最強者が最適者とは限らず、すべて環境との関係次第で結果は変化するが、社会的有用性を考えるあまり両者が混同されていると考えている。

ホ 人間とゴリラとの類似性を強調したり、自然界における人間の優位性を強調したりすることに、進化論批判への過剰な敵意を見ている。

問八

空欄乙に入る最も適切な語句を、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 最適な種は存在する

ロ 最適者が生存することはありうる

ハ 最適な種が存在する可能性は低い

ニ 最適者が生存するとはいえない

ホ 最適な種が存在するとはいえない

問九 傍線部5「先進国が途上国の発展を妨げる口実となるような南北問題」とあるが、具体的にはどういうことか。

その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 地球温暖化防止を口実にして、北半球の先進国が途上国の領土に進出していくこと。
- ロ 先進国の自然環境を守るために、途上国の生物多様性を無視していること。
- ハ 生物多様性の喪失への危機意識から、途上国の環境破壊を自粛していること。
- ニ 地球温暖化対策を名目に、先進国の途上国への人権差別を黙認していること。
- ホ 自然環境の保全を名目に、途上国の開発を阻害し経済発展を妨げていること。

問十 空欄 丙・丁 に入る最も適切な語句の組み合わせを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 丙 共存共栄 丁 相利共生
- ロ 丙 盛者必滅 丁 種間競争
- ハ 丙 群雄割拠 丁 資源配分
- ニ 丙 弱肉強食 丁 食物連鎖
- ホ 丙 因果応報 丁 興亡盛衰

問十一 傍線部6「むしろチャンスだということになるであろう」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 自然科学的進化論の立場からすれば、危惧されている温暖化による地球環境の激変も、新たな種の側にとっては繁栄、拡大の契機となるということ。
- ロ 人類が「支配者」だというのは誤解であり、人間以上に環境への優位を誇る大腸菌等を上回る、新たな「支配者」が誕生する契機になるということ。
- ハ 心配される地球環境の激変による絶滅の後に新たな種が誕生することは、地球そのものも新しく生まれ変わることになるということ。
- ニ 誰が地球の「支配者」かという視点ではなく自然科学的進化論の見地からすれば、環境の激変は人類がさらに進化する機会になるということ。
- ホ 人類を最も優れていて繁栄している「支配者」とする観念は誤りであり、新たな種の誕生によってそのことがはじめて証明されるということ。

問十二 この文章の内容に合致するものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ ダーウィンの進化論は、その後、自然を一元的に捉える見地から、生物多様性の保全と地球環境に対する配慮へと発展していった。
- ロ ダーウィンの進化論は、その後、人類を「支配者」とする誤った思想と合流し、先進国が途上国の発展に介入する口実を与えることになった。
- ハ ダーウィンの進化論は、その後、批判に対抗する立場から「突然変異」を起こし、進化した種ほど有能で価値が高いという優生思想を生みだしていった。
- ニ ダーウィンの進化論は、時間軸で種の種類基準を設けることで、従来の生物学がなしえなかった宗教や近代哲学への接近を容易にした。
- ホ ダーウィンの進化論は、宗教や近代哲学において前提となっていた人間精神の規定を揺るがし、現代思想の幕開けとなる知見をもたらした。
- ヘ ダーウィンの進化論は、優生学や社会生物学とは異なり、社会における人間の有用性や価値について科学的根拠をもって論じることを可能にした。

(二)

次のAは平安後期の歌人・藤原清輔が、Bは梁の將軍・曹景宗が、それぞれ詩歌によって帝王や貴顕に認められ、昇進を果たしたことを語った文章である。これらを読んで、あとの問いに答えよ。なおBには、設問の都合上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

A 和歌は興ある事なり。やむごとなき人および帝王にも、事を達するはその道なり。所望の申文もしくは名籍にも、これを作るは先蹤なり。源重之、小一条大将濟時に名籍を奉るとて作る歌、

みちのくのあだちの真弓ひくかとして君に我が身をまかせつるかな(和歌Ⅰ)

予、先蹤を追つて、叙位の時、故鳥羽院の申文に引く歌、

やへやへの人だにのぼる位山老いぬる身には苦しかりけり(和歌Ⅱ)

これ募り申す事あるも、四位にたびたび漏れし。昆弟等は四品にいたれるに、ゆるしなき事を思ひて詠ずるところなり。かしこく御感ありて、その後、四品に叙せらる。仰せていはく、「重代の者、かたはなる事だにあり。もつとも興あるの歌体なり」と。別様なりといへども、御哀憐のいたりか。

この所望の始めに仰せていはく、「これは歌詠みの男か。この道の家をなす者の、もつとも然るべし」と云々。その後むなく漏る。また御気色を取るのところに、和歌はおよその事忘却すと云々。かくのごとく、毎度和歌出来のゆゑ、恐れながら進覧するところなり。末代の勝事なり。世、もつて珍重の由、謳歌すと云々。

また、新院御給を申すに、度々漏れしかば、十二月二十日ごろ、事のついでに奏聞する歌、

位山谷の鶯人しれぬ音のみなかれて春を待つかな(和歌Ⅲ)

明年、御給を給はるところなり。競望の人、その数あり。而して仰せていはく、「和歌に優なるにより、清輔に給ふ」と云々。何の面目かこれにしかんや。事に堪へずといへども、この道によりて、度々面目あり。これ、多年の稽古のいたすところか。

愚詠の百首の歌、

梅の花同じ根よりは生ひながらいかなる枝の咲き遅るらん(和歌Ⅳ)

といふ歌を、故北の政所あはれましましたまひて、朝覲の行幸の御給にて五位従上に叙せらる。次に、新院に歌を奏して正五下に叙せらる。次に、申文の歌によりて、四位に叙せらる。三箇度の加級は、みな勸賞をもつてなり。二世忘れがたきの故、いささかこれを記し付く。

この度の加級のよろこびに、殿下の三河の君の言ひ送られたる返り事にいはく、

梅の花かれぬる枝と思ひしをあまねくめぐむ春もありけり(和歌Ⅴ)

(藤原清輔『袋草紙』による)

(注) 所望の申文もしくは名籍……任官叙位を上申する文書あるいは臣従を申し入れる名札。

位山……飛驒国(現在の岐阜県北部)の歌枕。位階の比喩として表現される。

やへやへの人……ずっと年下の弟。

新院……崇徳院。

故北の政所……関白(殿下)藤原忠通の正室、藤原宗子。

朝覲の行幸……天皇が父母等へ拜謁するために行幸すること。

B 景宗振旅凱入。帝於華光殿宴飲連句、令左僕射沈約賦韻。景宗不得韻、意色不平、啓求賦詩。帝曰、「卿伎能甚多、人才英拔。何必止在一詩。」景宗已醉、求作不已。詔令約賦韻。時韻已尽、唯余病二字。景宗便操筆、斯須而成。其辭曰、

去時兒女悲、
 歸來筋鼓
 借問行路人、
 何如霍去病

帝歎不已。約及朝賢、驚嗟竟日。詔令上左史。於是進爵為公、拜侍中、領軍將軍。

6

6

〔南史〕卷五十五による

〔注〕振旅凱入……戦いを終えて軍を整え、都に凱旋する。

帝……梁の武帝。

連句……詩を作ること。

沈約……人名。

賦韻……予め決めておいた韻字を順番に取って詩を作ること。

斯須……たちまち。

筋鼓……笛や太鼓。

霍去病……前漢の名将。

問十三 和歌Iと同じ修辭技巧が用いられている和歌として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ みちのくの あだちのはらの くらづかに おにこもれりと きくはまことか
- ロ みちのくの のだのたまがは みわたせば しほかせこして こほるつきかげ
- ハ みちのくの をだえのはしや これならん ふみみふまずみ こころまどはす
- ニ みちのくの しのぶのたかを てにすゑて あだちのはらを ゆくはたがごぞ
- ホ みちのくの あさかのぬまの はなかつみ かつみるひとに こひやわたらむ

問十四 傍線部Iの意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 世間から重んぜられる歌人でさえ、失敗は避けられない。
- ロ 代を重ねた歌人であっても、未熟な歌を詠むことすらある。
- ハ 親の七光りと称すべき者が、巧みに和歌を詠めるはずもない。
- ニ 重大な申し立てを行なう歌人は、大胆な行動に出ることがある。

問十五 和歌Ⅲの傍線部2「れ」の文法的説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 代名詞の一部分

ロ 自発の助動詞の連用形

ハ 下二段活用動詞の連用形の活用語尾

ニ 尊敬の補助動詞の未然形

ホ 副詞の一部分

問十六 傍線部3の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ どなたの面前で、こんなお願いができるだろうか。

ロ どんな褒美を、これから頂戴できるのだろうか。

ハ どのような名譽が、これに匹敵するだろうか。

ニ どんな顔向けが、できるというのだろうか。

問十七 和歌Ⅴの傍線部4「かれぬる枝」が喩えている人物は誰か。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄に

マークせよ。

イ 殿下 ロ 故北の政所 ハ 三河の君 ニ 清輔 ホ 昆弟等

問十八 和歌ⅠⅡⅢⅣⅤを詠まれた順に並べると、どのようになるか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ IⅣⅤⅢⅡ ロ IIⅢIⅣⅤ ハ IIIIⅡⅣⅤ ニ IVⅤⅢⅡI ホ VⅢⅣⅡI

問十九 問題文Aの内容と合致するものはどれか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 清輔の兄弟は皆優れた才能を持っていたため、才に劣る清輔のみ出世が遅れることとなった。

ロ 鳥羽院は清輔の和歌を読みながら、知らぬ振りをしていたが、清輔は粘り強く運動を続けた。

ハ 崇徳院は清輔の和歌の才を認め、詠進された述懐の歌を評価して、自ら昇叙の決定を下した。

ニ 関白の正室の後援によって、清輔は兄弟の中であって最も立身することができたのであった。

ホ 関白家の女房三河は、密かに清輔を慕っており、清輔の昇進の祝いに事寄せて和歌を贈った。

問二十 傍線部5「何必止在一詩」の読み下し文として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ なにかかならずやただいっしにあらん

ロ なんぞかならずしもただいっしにあらん

ハ なにかかならずとどめていっしにあらしめん

ニ なにかかならずただいっしにあらしめん

ホ なんぞかならずとどめていっしにあらん

問二十一 空欄6に入る字として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 哀 ロ 歛 ハ 競 ニ 催 ホ 迫

問二十二 傍線部7「何如霍去病」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 将として私と霍去病のどちらが勝るでしょうか。

ロ 霍去病であればどのように対処したでしょうか。

ハ どういった点が霍去病は偉かったのでしょうか。

ニ 霍去病よ、あなたならどう思われたでしょうか。

ホ 私がどうして霍去病に勝ると言えるでしょうか。

問二十三 問題文Bにおいて、皇帝や沈約たちは、曹景宗の詩のどんなところに感嘆したと考えられるか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 戦いに明け暮れる將軍が意外にも名詩を作ったところに感嘆した。
- ロ 皇帝の徳を霍去病が生きた前漢の武帝に例えたところに感嘆した。
- ハ 凱旋した兵士や家族の喜びを生き生きと描いたところに感嘆した。
- ニ 戦いの悲惨さを短い詩中にまざまざと表現したところに感嘆した。
- ホ 押韻させるのが難しい字を使い見事に作詩したところに感嘆した。

〔以下余白〕

<人間科学部 一般入試>

【国語】

●問題冊子8ページ：設問(二) B 問題本文 8行目

(誤)
上^ヲ
左^ニ
史^ニ
・
・
・

(正)
上^ラ
左^ニ
史^ニ
・
・
・

※「ヲ」を「ラ」に訂正。